聴雪（ちょうせつ）　上の間の襖絵

聴雪（ちょうせつ）

天皇が日常を過ごされる御常御殿のさらに北側，迎春（こうしゅん）や御涼所（おすずみしょ）といった奥向きの御殿に続き，御庭に面した風雅な「吹抜廊下」を進むと，孝明天皇のお好みにより建てられた御茶室「聴雪（ちょうせつ）」があります。

聴雪は，安政度御造営（安政2年〈1855〉）の2年後に建てられた入母屋造，柿葺（こけらぶき）の御茶室で，上の間，中の間，下の間，および水屋の間という四つの部屋で構成されています。

聴雪は，孝明天皇が将軍徳川家茂（いえもち）を招いて酒宴を催されたり，右大臣近衛忠凞（このえただひろ）を召してお茶湯を催されるなど，プライベートな空間として使用されました。

東西に三室並んだ一番東側の上の間は，四畳半のこじんまりとした部屋で，その北面と西面に襖が填められています。この部屋の襖絵を担当した原在照は，京都御所で多くの障壁画を担当した絵師で（栞其の七で説明），前記の杉戸絵も担当しています。

北面の襖絵は「芭蕉犬（ばしょうにいぬ）」と題され，輪郭を用いず，主題の芭蕉や犬の形を墨で詳細に画き，金泥で霞を配置し奥行きのある絵となっています。左面の下方に画かれる二匹の犬は，小型愛玩犬の狆（ちん）で，毛が長く，目がくりくりしていて，愛嬌のある顔立ちをしています。

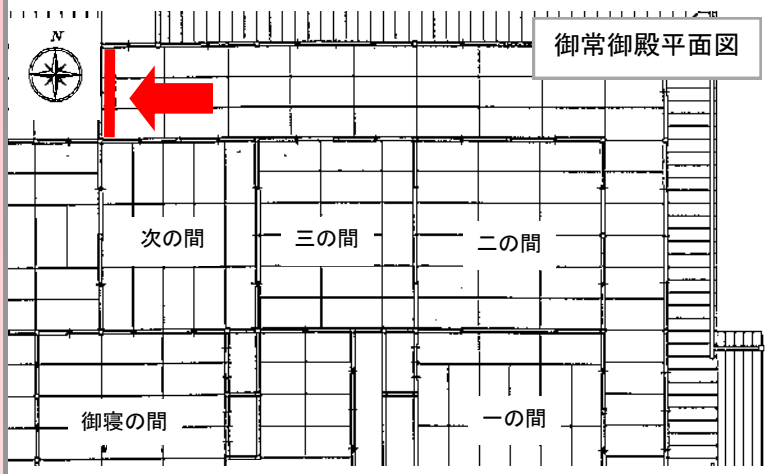
聴雪上の間　障壁画「芭蕉犬（ばしょうにいぬ）」　画：原在照

二匹の狆（ちん）

聴雪上の間　障壁画「葡萄栗鼠」 画：原在照

葡萄を取ろうとする栗鼠

御常御殿北御縁座敷　杉戸絵「葡萄栗鼠」 画：梅戸在親



杉戸絵「葡萄栗鼠」の位置

宮 通

御内庭

西面の襖には「葡萄栗鼠」が画かれています（写真：上段）。こちらも同じ技法で，４面にわたり中央から分かれた葡萄の枝が画かれ，たわわに実った葡萄を取ろうとしている三匹の栗鼠が画かれています。

ちなみに「葡萄栗鼠」と題された障壁画は，御常御殿の北御縁座敷にもあります（写真：中段）。この杉戸絵は梅戸在親が画いたもので，栗鼠が枝を伝って葡萄の実を取ろうとしている場面が共通しています。在親も原派の絵師で，原派は円山四条派や土佐派などの技法を学び独自の画風を築いた原在中を祖とし，徹底して細部描写にこだわる流派と言われています。